

広島市における感染症発生動向調査結果について(2006 年)

生 活 科 学 部

は じ め に

平成 11 年 4 月、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」が施行され、感染症発生動向調査事業が全国的規模で実施されている。広島市では、平成 13 年 4 月から衛生研究所に感染症情報センターを設置し、感染症情報の解析、提供を行っており、今回、2006 年の広島市における感染症患者発生状況をまとめたので報告する。

方 法

1 対象疾患

対象疾患は、国の実施要綱に示されている一類感染症(エボラ出血熱等 7 疾患)、二類感染症(急性灰白髄炎等 6 疾患)、三類感染症(腸管出血性大腸菌感染症 1 疾患)、四類感染症(E 型肝炎等 30 疾患)、全数把握対象の五類感染症(アメーバ赤痢等 14 疾患)及び定点把握対象の五類感染症(インフルエンザ等 28 疾患)の合わせて 86 疾患とした。

2 患者情報の収集

全数把握対象の感染症については市内医療機関から、定点把握対象の五類感染症については定点医療機関から週単位又は月単位で、各行政区に置かれている保健センターに届出又は報告される。各保健センターでは、感染症発生動向調査システムにより患者情報の入力処理と感染症情報センターへの報告処理が行われ、感染症情報センターでは全市分の集計処理を行った。全国情報は、中央感染症情報センター(国立感染症研究所)から還元されるデータを用いた。

3 定点医療機関

定点把握対象の五類感染症については、定点医療機関(患者定点)から疾患区分により週単位又は月単位で報告される患者発生情報を収集した。市内に置かれた患者定点の内訳は、インフルエンザ定点(小児科定点を含む) 37、小児科定点 24、眼科定点 8、性感染症定点 9、基幹定点 7 である。

4 調査期間

平成 18 年 1 月 2 日～平成 18 年 12 月 31 日(2006 年第 1 週～第 52 週)。

結 果

1 全数把握対象疾患

医療機関から届出のあった疾患は、二類感染症はコレラ、細菌性赤痢の 2 疾患、三類感染症は腸管出血性大腸菌感染症、四類感染症は A 型肝炎、つつが虫病、日本脳炎、レジオネラ症の 4 疾患、五類感染症はアメーバ赤痢、ウイルス性肝炎、急性脳炎、クロイツフェルト・ヤコブ病、後天性免疫不全症候群、ジアルジア症、梅毒、破傷風の 8 疾患で、合わせて 15 疾患であった。一類感染症については届出がなかった。2006 年における各疾患の届出数を表 1 に示した。比較的届出数の多かった疾患は次のとおりである。

(1) 腸管出血性大腸菌感染症

30 人の届出があり、2005 年の 15 人から大きく増加した。すべて散発事例であった。月別では、7 月が 9 人と最も多く、7 月から 9 月の 3 か月間に 21 人の届出があった。血清型別では、O-157 が 23 人と最も多く、次いで O-111 が 4 人、O-26 が 2 人、O-145 が 1 人であった。年齢別では、例年と比べて成人の患者が多く、20 歳以上が 15 人と 50%を占めていた。

(2) 後天性免疫不全症候群

8 人の届出があった。このうちエイズが 5 人、無症候性キャリアが 2 人、その他が 1 人であった。

表 1 全数把握対象疾患の届出数(2006 年)

類型	疾 患 名	届出数
二類	コレラ	1
	細菌性赤痢	2
三類	腸管出血性大腸菌感染症	30
四類	A 型肝炎	7
	つつが虫病	2
	日本脳炎	1
五類	レジオネラ症	3
	アメーバ赤痢	4
	ウイルス性肝炎	3
	急性脳炎	10
	クロイツフェルト・ヤコブ病	3
	後天性免疫不全症候群	8
	ジアルジア症	1
	梅毒	4
	破傷風	1

性別では、すべて男性であった。年齢別では、30歳代が4人と多かった。感染経路は、性行為によるものが7人でほとんどを占めており、同性間が4人、異性間が3人であった。

(2) 急性脳炎

10人の届出があり、2005年の1人から大きく増加した。このうち3人はインフルエンザウイルスが原因であった。年齢別では、9歳以下が5人と半数を占めていた。

(4) A型肝炎及びウイルス性肝炎

四類感染症であるA型肝炎は、7人の届出があった。また、五類感染症であるウイルス性肝炎は、3人の届出があり、病原体はすべてB型であった。このうち2人が性行為による感染であった。

2 定点把握対象五類感染症

(1) 週単位報告疾患

インフルエンザ定点、小児科定点、眼科定点及び基幹定点から毎週報告される21疾患の報告数を表2に示した。年間の定点当り累積報告数は、感染性胃腸炎の547人が最も多く、続いてインフルエンザ209人、水痘101人、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎79.9人、流行性耳下腺炎53.2人、流行性角結膜炎45.7人、突発性発疹35.3人、マイコプラズマ肺炎29.7人、などとなっている。報告数が比較的多く、年間の推移に特長が認められたインフルエンザ、感染性胃腸炎、流行性耳下腺炎及びマイコプラズマ肺炎について検討した。これら4疾患について、広島市と全国における週別の定点当り報告数の推移を図に示した。

a インフルエンザ

年間の定点当り累積報告数は209人で、前年の307人と比べ前年比0.68とやや減少した。17年/18年シーズンは、17年第49週に定点当り1.14人と例年より早く流行期に入った。流行のピークは18年第4週(定点当り51.1人)で、その後減少が続き、第11週には定点当り0.78人とほぼ終息状態となったが、第17週から再び定点当り1.00人を超え、第21週にかけて小規模な流行となった。

b 感染性胃腸炎

年間の定点当り累積報告数は547人で、前年の406人と比べ前年比1.34とやや増加した。年間の累積報告数は、小児科定点患者総数の61.6%を占め、小児科定点報告対象疾患の中で最も多かった。

年初から定点当り15人前後の比較的多い状態で推移したが、3月下旬の第12週ごろから減少傾

向となり、夏季は低い水準であった。しかし、9月下旬の第39週から、例年よりかなり早く増加が始まり、前年より3週間早い第47週に、定点当り23.3人のピークを迎え、その後減少した。

c 流行性耳下腺炎

年間の定点当り累積報告数は53.2人で、前年の128人と比べ前年比0.41と大きく減少した。年間の累積報告数は、小児科定点患者総数の6.0%で、小児科定点報告対象疾患のうち4番目に多かった。

年初は多い状態であったが、減少傾向で推移し、夏季以降は低い水準であった。

d マイコプラズマ肺炎

年間の定点当り累積報告数は29.7人で、前年の8.84人に比べ前年比3.36と大きく増加した。4月ごろから例年同時期と比べて多い状態が続いた。

(2) 月単位報告疾患

月単位で報告される定点把握五類感染症(性感染症定点から報告される性感染症4疾患及び基幹定点から報告される薬剤耐性菌感染症3疾患)の報告数を表3に示した。

a 性感染症

性感染症4疾患のうち、年間の定点当り累積報告数が最も多かったものは、性器クラミジア感染症の22.5人で、次いで淋菌感染症の16.7人であった。性器ヘルペスウイルス感染症と尖圭コンジローマを加えた性感染症4疾患の総数は、前年比1.27とやや増加した。

b 薬剤耐性菌感染症

年間の定点当り累積報告数は、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症が78.0人と最も多く、次いでペニシリン耐性肺炎球菌感染症15.9人、薬剤耐性緑膿菌感染症2.84人の順であった。薬剤耐性菌感染症3疾患の総数は、前年比0.93とほぼ横ばいであった。

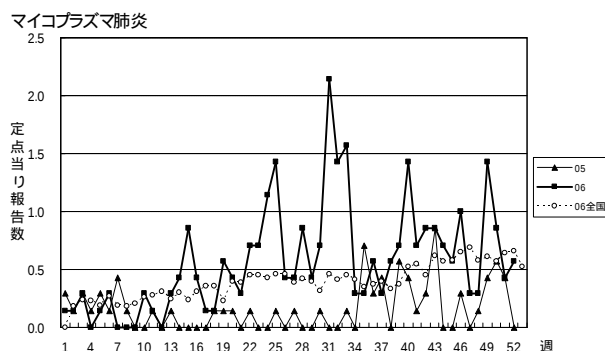
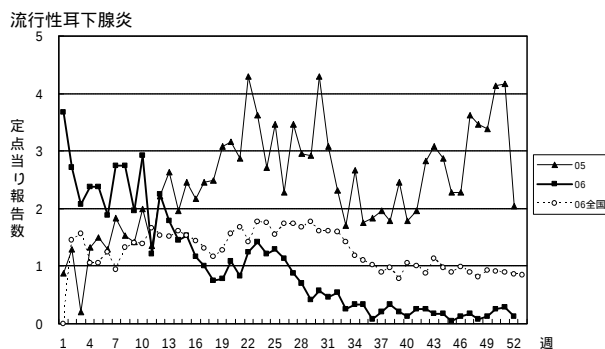
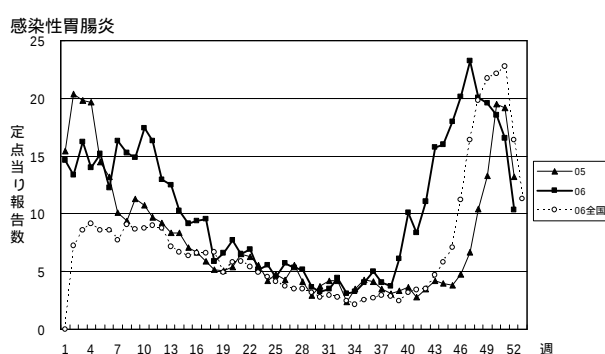
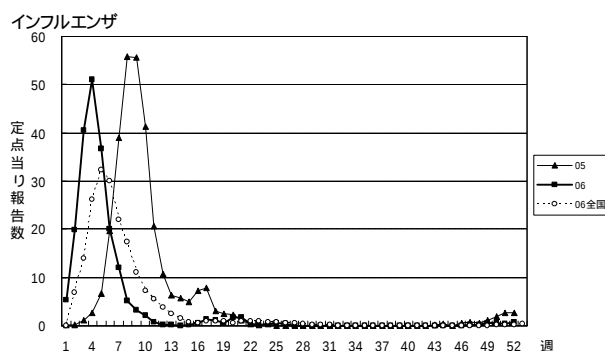


表2 定点把握対象五類感染症患者報告数
(週単位報告分) (2006年)

疾患名	報告数 ()内は定点当り 累積報告数
インフルエンザ	7,724 (209)
咽頭結膜熱	405 (17.0)
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1,913 (79.9)
感染性胃腸炎	13,103 (547)
水痘	2,409 (101)
手足口病	176 (7.35)
伝染性紅斑	435 (18.3)
突発性発しん	844 (35.3)
百日咳	28 (1.13)
風しん	9 (0.36)
ヘルパンギーナ	680 (28.5)
麻しん	3 (0.12)
流行性耳下腺炎	1,273 (53.2)
RSウイルス感染症	256 (10.8)
急性出血性結膜炎	13 (1.68)
流行性角結膜炎	363 (45.7)
細菌性髄膜炎	5 (0.70)
無菌性髄膜炎	76 (10.8)
マイコプラズマ肺炎	208 (29.7)
クラミジア肺炎	0 (0.00)
成人麻しん	1 (0.14)

表3 定点把握対象五類感染症患者報告数
(月単位報告分) (2006年)

疾患名	報告数 ()内は定点当り 累積報告数
性器クラミジア感染症	199 (22.5)
性器ヘルペスウイルス感染症	91 (10.2)
尖圭コンジローマ	56 (6.30)
淋菌感染症	147 (16.7)
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌 感染症	546 (78.0)
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	111 (15.9)
薬剤耐性緑膿菌感染症	20 (2.84)

図 定点当り報告数の週別推移